

国際スポーツイベントにおけるマネジメントに関する組織論的研究 ～2006年FIBAバスケットボール世界選手権日本大会を事例として～

スポーツビジネス研究領域

5006A034-8 坂田健太郎

研究指導教員： 木村和彦教授

【緒言】

今日では、オリンピックやワールドカップに代表される国際スポーツイベントは人々の関心事のひとつとして、その機運が高まっている。しかし、原田(2002)が指摘するように、巨大スポーツイベントはメディアの発展とともに巨大産業化し、放送権の高騰やスポーツの商業化を招いた。そしてその結果、不十分な資本金、イベント開催費用の甘い見通し等のマイナスの側面が指摘される。

2006年に行われたFIBAバスケットボール世界選手権日本大会(以下世界選手権という)では、約13億円の赤字を計上したとされる。しかし、この世界選手権の赤字の問題のみが注目され、報告書や統括の資料は作成されているが、十分な原因究明や大会の反省がされていない。

また、これは、選手や監督、一人のリーダーの失敗といった問題を越え、まさに組織の失敗あるいは組織の失敗という現象としてとらえることが妥当であるといえよう。

【研究の目的】

これらバスケットボール界の現状を捉え、本研究では、バスケットボール世界選手権を失敗と捉え、以下の2点を目的として設定した。

① 世界選手権における組織の失敗のメカニズムを解明すること。

② 組織の失敗のメカニズムを解明することで、同じ過ちを繰り返さないようにし、以後の国際スポーツイベントにおける組織マネジメントに役立てること。

【研究方法】

本研究では、世界選手権組織委員会およびJABBAの組織に焦点をあて、世界選手権における組織の失敗のメカニズムを明らかにするために図のような2段階の研究方法を取った。

研究1では、世界選手権における組織の失敗を構造的に把握するために失敗の事実を測定した。おもな指標として、①収支、②観客動員数、③日本代表の成績④メディア露出、⑤認知度の5項目を対象とした。

⑤の認知度に関してはアンケート調査を用いて認知度を調査した。

調査方法としては早稲田大学の学生を対象に、質問紙による訪問留置法を用いた。その結果205名のサンプルに対して有効回答数は190、有効回答率は92.3%であった。



【図：研究の分析枠組み】

研究2では、世界選手権における失敗メカニズムを解明するために、大会報告書・統括資料を使用し、事実関係を把握した後に畑村(2002)と戸部、野中ら(1992)の失敗枠組みを援用し、失敗原因を重要度の高いものから順に第1失敗原因、第2失敗原因、第3失敗原因の3段階、全10項目を仮説として設定した。各項目は1)リーダー(シッパ)の不在、2)明確な目的・戦略の欠如、3)短期的な大会計画、4)あいまいな組織体制、5)共通認識・モチベーションの欠如、6)バスケットボールの価値向上への努力・認識不足、7)短期的な強化方針、8)補助金・登録費頼みの財政基盤、9)代理店、外部団体依存、10)国際交渉力の欠如・国際スポーツイベントへ知識・経験不足。

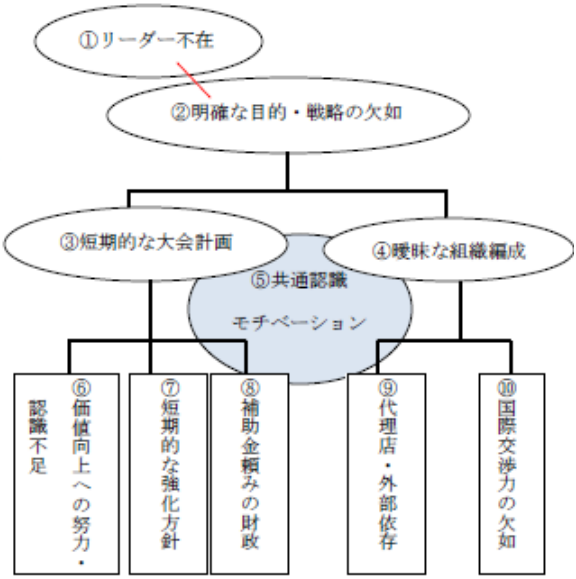
以上の仮説を検証するため、面接調査を用いて各失敗原因および失敗原因間の関係性を検証した。被調査者には、組織委員会・(財)日本バスケットボール協会・地方自治体・地方バスケットボール協会の関係者計13名を選定した。1回あたりの面接時間は、概ね1時間であった。

【結果と考察】

研究1: 分析の結果、②観客動員数について、大会自体の観客動員数、大会前後の観客動員数ともに、前年度を上回ったことにより、世界選手権の失敗から除外した。①収支、③日本代表の強化、④メディア露出⑤認知度については測定の結果、失敗とした。

研究2: 面接調査の結果、設定した10項目の仮説は、失敗原因として当てはまることがわかった。また、10)国際交渉力の欠如の項目に新たに「国際スポーツイベント経験・知識不足」を追加した。特に、第1失敗原因項目である2)明確な目的・戦略の欠如の項目

が最も今大会で大きな原因であり、すべての原因の元になったことを読み取ることができた。



【図: 失敗の枠組み】

【まとめ】

本研究では「失敗学」という枠組みを使用し、バスケットボール世界選手権における組織の失敗メカニズムを質的に解明することができたと考えられる。この手法により、大会を招致・開催するにあたっての過程で、組織間でのやりとりや組織の価値観、モチベーションなど、組織関係者たちの主観的側面等の質的な運営・経営実態を把握するという点では有意義な結果を得ることができた。